

アルゼンチン -- 名門チームと二部降格（特集 途上国・新興国のスポーツ）

著者	菊池 啓一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	237
ページ	36-37
発行年	2015-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003192

アルゼンチン

名門チームと二部降格

菊池 啓二

アルゼンチンのスポーツといえばサッカーである。もちろん、サッカーが嫌いなアルゼンチン人も（特に上流階級には）決して少なくはなく、北米NBAのサンアントニオ・スパーズに所属するエマヌエル・ジノビリを輩出したバスケットボールや、ガブリエラ・サバティニーが活躍したテニスの人気も高い。また、一九五三年にファン・ドミンゴ・ペロンによって発せられた大統領令により、アルゼンチンの国技は馬に乗りながら専用のボールを奪い合う「パト」であると定められている。しかし、試合翌日でなくともスポーツ紙面の八割近いページが割り当てられていることから明らかにであるように、アルゼンチンのスポーツ界はサッカーによってほぼ独占されている。そこで、本稿ではアルゼンチンの国内リーグの名門チームと、そのうちの一つであるリーベル・プレート（以下、リーベル）の二部降格およびその余波について簡単に述べてみたい。なお、南米のサッカーをご存知の方には物足りない内容であろう点を予めお断りしておく。

●アルゼンチンの名門チーム

筆者の大まかな印象では、ブエノスアイレスの街角における近所のおじさんたちの会話のテーマのほとんどは、目の前を通り過ぎた女性の容姿に関するものか、サッカーの国内リーグにまつわるものである。昨年ブラジルで開催されたFIFAワールドカップの決勝戦に先発出場した一人は全員国外のチームに所属していたが、その多くはアルゼンチンの国内リーグでの活躍を認められてヨーロッパ各国のチームへの移籍を勝ち取った選手たちである。このような傾向もあって、全体的にアルゼンチンにおける国内リーグへの関心は極めて高く、国外在住のアルゼンチン人たちも自国のリーグ戦の結果を常に気にしている。

それでは、国内リーグではどのチームの人氣が高いのだろうか。表は、全国紙『クラリン』の傘下にあるテレビ局「TyCスポーツ」がウェブサイトで二〇一五年一月から三月にかけて行った調査の結果を示したものである。アルゼンチン人がその生涯において自らの応援するチームを変更することは極めて稀であるため「アンケート」ではなく「インチャ（サポーター）国勢調査」と名付けられた同調査にはおよそ二五万人が参加し、日本のサッカーファンにも馴染み深いボカ・ジュニオルス（以下、ボカ）が一位、リーベルが二位となった。ロサリオ・セントラルとニューウェルス・オールド・ボーイズが三位と四位に入ったの

はやや意外であるが、その後に続くインデペンディエンテ、ラシン・クルブ、サン・ロレンソは、前記のボカとリーベルと共に、その歴史的伝統やソシオ（クラブ会員）の多さから「名門」であるとされているチームである。名門チームのサポーターの要求が厳しいことは万国共通であると思われるが、なかでもリーグ最多の三六回の優勝を誇るリーベルのインチャの関心は、「スーペルクラシコ」と呼ばれる対ボカ戦に勝利してボカのインチャを馬鹿にする「権利」を得ることと自チームが一部リーグ（プリメーラ・ディビシオン）で優勝することとにあり、彼らにとって二部リーグ（プリメーラ・B・ナシオナル）とはリアリテイの無いおとぎ話の世界であつた。

●リーベルの二部降格とその余波

そんなリーベルがクラブ史上初の二部降格を経験したのは、二〇一〇―一一シーズンのことであつた。ただし、このシーズンの同チームの成績は前期が二〇チーム中四位、後期が九位である。決して悪くはない成績であるが、それ

表 アルゼンチンの人気上位10チームと2014シーズン(半期)の平均観客動員数

チーム名 (本拠地)	インチャ数(%)	平均観客動員数
ボカ・ジュニオルス (ブエノスアイレス)	22.5	41,000
リーベル・プレート (ブエノスアイレス)	16.1	54,000
ロサリオ・セントラル (ロサリオ)	9.9	36,750
ニューウェルズ・オールド・ボーイズ (ロサリオ)	7.7	39,000
インデペンディエンテ (アベジャネーダ)	7.5	31,833
ラシン・クルブ (アベジャネーダ)	5.5	30,750
サン・ロレンソ (ブエノスアイレス)	4.7	19,750
タジェーレス (コルドバ)	3.8	
コロソ (サンタフェ)	2.7	
エストゥディアンテス (ラプラタ)	2.4	23,400

(注) タジェーレスとコロソは下部リーグに所属していたため、「平均観客動員数」が空欄。
(出所) TyCスポーツが2015年1月から3月にかけて行った「インチャ国勢調査」とlivefutbol.comのデータを基に筆者作成 (http://www.tycsports.com; http://www.livefutbol.com)。

でも降格してしまったのは過去三年間の一試合当たりの平均勝ち点(プロメディオ)を基に降格チームが決定されるためである。この「プロメディオ」制は有力チームが一シーズンの不調で二部に降格してしまうことを防ぐ目的で考案されたものだといわれており、南米でもアルゼンチンだけでなくボリビア、コロンビア、パラグアイの国内リーグで採用されている(ウルグアイの国内リーグも類似の制度を採用している)。しかし

その一方で、昇格一年目のチームには極めて不利であり(リーグの上位に食い込まなければ一年で降格してしまう)、また、好調なチームが数年前の不調が原因で降格の憂き目にあってしまうこともある。リーベルも二〇〇八―〇九シーズン前期に最下位で終わったツケを挽回することができず、二〇一〇―一一シーズン終了時点でプロメディオが二〇チーム中一七位になってしまった。そして、二部リーグ四位のベルグラノとのホーム&アウェー方式の入れ替え戦に出場することになり、アウェーの第一戦が〇対二、ホームの第二戦が一对一(インチャの暴動により後半途中で打ち切り)という惨憺たる結果で二部に降格してしまったのである。

この結果に慌てたのが当時のアルゼンチンサッカー協会会長のフリオ・グロンドーナであった。前掲の表に示されているように、リーベルは一試合あたりの観客動員がアルゼンチンで最も多いチームであり、同チームの二部降格によるリーグ全体の経済的損失は非常に大きい。さらに、もしリーベルが一部への昇格に失敗してしまうと、その損失は拡大する一方で

ある。そこで、彼は一部リーグと二部リーグを統合した四〇チームによるリーグを新たに創設し、リーベルの降格を阻止しようとした。しかし、一九七九年から死去する二〇一四年まで三五年間会長職の座にあり続け、「独裁者」とも評された彼をもつてしてもこのような強引な改革を押し進めることは難しく、リーベルは二〇一一―一二シーズンを二部リーグで戦うこととなった。

幸いグロンドーナの心配は杞憂に終わり、アルゼンチン代表のフェルナンド・カベナギと元フランス代表のダヴィド・トレセゲ(彼の両親はアルゼンチン人で、二重国籍を有している)を獲得するというなりふり構わぬ補強を行ったリーベルは二位のキルメスを勝ち点一差で振り切つて二部リーグ優勝を果たし、一年で一部リーグに復帰した。しかし、二〇一二―一三シーズンにグロンドーナ自身がかつて会長を務めていたインデペンディエンテが降格するとリーグ改革の動きを再燃させ、死去する二カ月前の二〇一四年五月に一部リーグを三〇チームに拡大する案をまとめた。その結果、二〇一五年から一部リーグは三〇

チームによる総当たり戦となり、二部への降格も「プロメディオ」での下位二チームのみという制度に変更された。すなわち、名門チームの降格がきっかけとなり、彼らが二度と二部に降格することがないようリーグのルールが大幅に変更されたのである。

以上のようなルール変更の他にも、ボカのインチャによってリーベルの「B」(二部)への降格を揶揄する「Ríbe」(本来の綴りはRíver)なる造語が生み出されたり、入れ替え戦をテレビで観戦中にありつたけの罵詈雑言を画面に浴びせかける様子を家族によってYoutubeにアップロードされてしまったリーベルのインチャのタノ・パスマン氏が一躍時の人になったりするなど、リーベルの二部降格は一種の社会現象と化した。日本でも二〇一二年のガンバ大阪のJ2降格が驚きをもって捉えられたが、サッカー大国アルゼンチンにおける名門チームの二部降格の余波の大きさは計り知れないものようである。

(きくち ひろかず/アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)